

1. 大蔵谷の名称と範囲の変遷

先行研究に基づいて、奈良時代から現在に至るまで、断片的ではあるが、大蔵谷の名称と範囲の変遷を整理した。ここから、現在の大蔵谷の名称と範囲がいつごろから現在のように認識されてきたのかなどについて考察した。

現在の大蔵谷の名称と範囲は、江戸期から明治22年(1953年)にかけての大蔵谷村の範囲が基盤となってきたのではないかと考えた。南の明石海峡と北の六甲山地西端の台地とに挟まれ、西は明石城の東外堀、東は山田村の範囲(平凡社地方資料センター編 1999:135)。大蔵谷の範囲に対する認識は、各時代における個別の社会的文脈や地域に暮らす主体によって異なる可能性も高く、これらを特定するためにはさらに詳しい分析が必要である。

2. 大蔵谷に関する先行研究

大蔵谷に関する先行研究は、大きく分けて、次の三つに分類することができた。第一に、大蔵谷宿の歴史に関する研究があった。大蔵谷が古代より交通の要衝地であったこと、遺跡の分析などから大蔵谷に明石駅家があった可能性が高いことなどが指摘されていた。

第二に、近世以降の大蔵谷宿および大蔵谷の社会変化に関する研究があった。漁に加え様々な地場産業が栄え、変容していったこと、伊川谷有瀬地区では市街地化が進み農地が減少したこと、神社の秋季祭礼の特性や、祭礼が地域の紐帯の維持に大きな役割を持っている点などが指摘されていた。

第三に、大蔵谷宿の地域づくりの実践に関する研究があった。祭礼などの地域文化の理解と保全に向けた実践的研究が、1990年代はじめから現代に至るまで実施され、教員や学生が地域文化に参加することで積極的に地域文化の継承に関わっていく地域づくりの方向性が打ち出されていた。

先行研究は、大蔵谷宿という地域枠で社会変化を分析した研究が大多数であった。大蔵谷と大蔵谷宿は、宿場が置かれた地域としての大蔵谷というように同義で用いられることもあった。大蔵谷宿は西国街道の宿場の一つであり、このことが地域形成の主軸となってきたと理解されてきたと考えられた。

3. 大蔵谷を捉える視点

大蔵谷という地域を捉える意義、捉えるための視点を考察した。大蔵谷は、大蔵谷宿にとってそれ自体が内包される最も身近な地域の一つであり、大蔵谷を捉えることは、大蔵谷宿が大蔵谷の様々な人やものなどのつながりの中で形成され変容する様を理解する一視点となる可能性がある。

大蔵谷宿を中心として大蔵谷を捉えるならば、大蔵谷宿とその北側地域との関係への理解が重要となると考えられる。そのために、例えば、朝霧川、そしてかつて大蔵谷宿に流れていた両馬川、新川やこれらの河川沿い陸路の交通利用を理解することは一視点となると考えた。また、大蔵谷宿の人々が朝霧川の中上流域に農地を所有し、農業を営んできたことを踏まえると、土地所有、生業も視点の一つになると考えた。

4. 流域特性の相対的理解に向けて

大蔵谷の、特に朝霧川流域の特性を相対的に理解する第一歩として、インドネシアカリマンタンの河川との比較を行った。単純に比較することはできないが、河川規模、傾斜、水流、陸路、民族などの点で違いを整理した。朝霧川流域の特性は、河川規模、傾斜、水流については、短く急流であり、大雨などによる洪水などがある点、陸路については、街道が発達したことが地域形成に大きく影響した点、民族については、河川距離が短いことで、低地の人が中上流域に農地を拓くなどの人の往来や流域内の土地利用があると考えられた。

5. 論文、講義として成果還元

【論文】

鈴木遥(2022)「兵庫県明石市大蔵谷に関する先行研究レビュー—宿場町とその周辺とのつながりの理解に向けて—」人文学部紀要(42)、pp.123-129.

鈴木遥(2022)「大蔵谷における南北方向の地域形成—交通、生業、土地所有の着眼点の整理—」2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書、pp.43-46.

鈴木遥(2022)「朝霧川流域から地域を考える」2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書、pp.47-49.

【講義】

流域特性の相対的理解に向けた考察は、「人文の知専門講義IV」の講義内容として学部教育に還元した。